

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

(65)

石原 昌家

1995年1月16日の朝、琉球新報、沖縄タイムス紙を受け取った読者は度肝をぬかれたはずだ。平和の礎の全刻銘予定者名簿が掲載されたので、48頁の分厚い紙面だった。それは立命館大学の「平和ミュージアム」(平和資料館、写真参照)で、その新聞を戦争資料として展示するほど注目を集めた。私は学生たちと沖縄戦戦災実態調査を行うことで初めて知った事柄が多々あったので、関係部

文化

局の最終方針をさしおいて直接知事に要望せざるを得なかった。そこで新聞掲載の礎の全刻銘予定者名簿が掲載されたので、48頁の分厚い紙面だった。それは立命館大学の「平和ミュージアム」(平和資料館、写真参照)で、その新聞を戦争資料として展示するほど注目を集めた。私は学生たちと沖縄戦戦災実態調査を行うことで初めて知った事柄が多々あったので、関係部

平和ミュージアム

監修/立命館大学国際平和ミュージアム



Iwanami Peace Archives DVD BOOK Museum for Peace
十五年戦争、ベトナム戦争、イラク戦争、現代の紛争など20世紀初頭からの戦争の加害と被害の実態を詳細な解説と豊富な写真をもとに紹介する

沖縄の全戦没者簿を掲載した新聞紙面を戦争資料として展示した立命館大学国際平和ミュージアムが監修による書籍「平和ミュージアム」(岩波書店出版)

知事への要望

94年10月24日付で私は沖縄県知事選直前の再選をめざす大田昌秀知事宛に私信を送った。私信によって知事本人に直接届くようにした。私信の内

親展で知事決断迫る 全戦没者掲載へ予算確保

平和の礎⑦

容は、この4年間の知事の平和行政を讀んだうえで、「このような世界史にも残り、国際平和の発信地として大きなインパクトを与え

ることは物理的に不可能な平和行政を讀んだうえで、このような世界史にも残り、国際平和の発信地として大きなインパクトを与え

新聞社への要望

新聞社に情報提供の形で戦没者名簿を掲載させ、県民全体でその調査結果をそれぞれが検証することが絶対に必要であることを、私が

県幹部の依頼をうけ、94年11月26日付で、私は琉球新報社三木健編集局長と沖縄タイムス社大山哲編集局長宛てにまったく同じ文面で、要請書を送った。文面は当日の紙面で県の戦没者全数調査の結果が発表

まで足を運べない状態か、寝たがりの状況にある可能性がたかい。また、出身地から転住しているお年寄りが多いので、出身地の公民館まで足を運んで確認することはほとんど期待できない。これらの点を考え

作業に入ることは、写しの手紙で説明してあるとおり、とても危険です。新聞に沖縄県民だけの名簿だけでなく、県民の了解は得られることだと思えます。県への批判は絶対に来ないであろう、私の予測も書き添えた。そのうえ、「平和の礎」という世界にも例のない歴史的な事業であればこそ、数千円のお金が足りないというところで、最も基礎的な作業部分で悔いを残すことがあってはいけない、な

しました。超多忙な知事のお時間を削いででも、この手紙を是非お読みいただきたい。このように形で私信を送らせていただきました。是非とも最後までお目を通してくださるようお願い申し上げます。お返事は、それから間もなく私に、数人の県幹部の会合の席に呼ばれた。その際の結論は、県はほう大な戦没者名簿の新聞掲載の予算を組んでないので、琉球新報社と沖縄タイムス社へ検討委員会委員長とし

『浦添市史』での比嘉昇市長家の誤記事例を念頭において、強く要望したのである。それで知事は、関係部に名簿の新聞掲載を指示したと思われる。『浦添市史』での比嘉昇市長家の誤記事例を念頭において、強く要望したのである。それで知事は、関係部に名簿の新聞掲載を指示したと思われる。『浦添市史』での比嘉昇市長家の誤記事例を念頭において、強く要望したのである。それで知事は、関係部に名簿の新聞掲載を指示したと思われる。

さ、それを市町村で再縦覧させることだが、石板への刻銘に先立って地元新聞社として是非、新聞記事として沖縄県民の全戦没者名を報道していただきたい。思い、早急にご検討ください。この強い私の要請にたいして、新聞社から電話があった。それを受けて私は、即刻、大きな文字で、刻銘予定者名簿の新聞掲載に費用捻出の「大田知事の大英断をと、94年12月3日

ンにして、戦前戦中、新聞が国民を戦争へ駆り立てていった反省も込めて、記事として新聞での名簿掲載することを強く要請した。

最後に「私は、これまで調査してきた経験上、現段階における最善の方法は、やはり新聞掲載によって寝たがりの年配者でも戦死者名簿をチェック可能にすることだと確信しており、まず「役所や公民館での名簿閲覧方法」という、このような形で県民の目を通したから」ということで刻銘

この知事への「親展」の手紙から1カ月半後、前回写真のとおり全戦没者刻銘予定者名簿が記事として掲載された。(今回は除幕式その後について。次回回は8月後半掲載予定)

しかし、本題は現在進行中の市町村ごとに戦没者名簿の閲覧をさせているが、関係者全員がそれを確認す

ることは物理的に不可能な平和行政を讀んだうえで、このような世界史にも残り、国際平和の発信地として大きなインパクトを与え

まで足を運べない状態か、寝たがりの状況にある可能性がたかい。また、出身地から転住しているお年寄りが多いので、出身地の公民館まで足を運んで確認することはほとんど期待できない。これらの点を考え

作業に入ることは、写しの手紙で説明してあるとおり、とても危険です。新聞に沖縄県民だけの名簿だけでなく、県民の了解は得られることだと思えます。県への批判は絶対に来ないであろう、私の予測も書き添えた。そのうえ、「平和の礎」という世界にも例のない歴史的な事業であればこそ、数千円のお金が足りないというところで、最も基礎的な作業部分で悔いを残すことがあってはいけない、な

最後に「私は、これまで調査してきた経験上、現段階における最善の方法は、やはり新聞掲載によって寝たがりの年配者でも戦死者名簿をチェック可能にすることだと確信しており、まず「役所や公民館での名簿閲覧方法」という、このような形で県民の目を通したから」ということで刻銘

この知事への「親展」の手紙から1カ月半後、前回写真のとおり全戦没者刻銘予定者名簿が記事として掲載された。(今回は除幕式その後について。次回回は8月後半掲載予定)